

五感を使った音遊びにおける子どもの表現の育ちについて ～身体表現活動、楽器活動の場面から見えること～

後藤祐子・星崎明里

The growth of children's expression in sound play using the five senses

- What we can see from physical expression activities and activities
using musical instruments -

Yuko GOTO, Akari HOSHIZAKI

要約：本論では、筆者らが行ってきた五感を使った音遊びの実践記録を基に、身体表現活動場面でみえた子どもの表現する姿と、楽器活動場面でみえた子どもの表現する姿から、子どもの発達と表現の育ちについて論じた。また、保育の中で音や音楽を使うことが、子どもの育ちをどう支えているのかについても述べ、五感を使った音遊びの意義についても考察した。

1.はじめに

筆者らは、宮崎学園短期大学附属認定こども園 A 園 B 園にて「音で遊ぼう」という五感を使った音遊びの実践を、同園の保育教諭と共に行っている。0 歳児～5 歳児の各クラスで継続的に行われているこの音遊びの中で、子どもたちが多様な音や音楽の体験を重ねながら、自分らしく表現する姿を見てきた。

藤澤・平松・林（2020）は、幼児期の教育において展開されている、五感を育てる遊びや活動が有する教育的な意味を検討し、保育者と子どもの関わりでの相互作用による子どもの感性の育ちがあること、また、子ども自身が自分の感覚と出会い、仲間と「いま・ここ」を共有することが大切であり、保育者は子どもを敏感に感じるとる感性を欠かすことはできないと述べた。

また、小澤・小川（2022）は、「子どもが自己を表現しやすい」「表現された子どもの姿を肯定的に捉えやすい」ことが五感を使った音遊びの特長であると述べており、五感を使った音遊びを保育の中で行う意義についても保育の養護的視点から考察している。子どもが情緒的安定感をもって過ごし、自分の気持ちを安心して表すことができるという養護的視点を大切にした保育に、五感を使った音遊びが寄与できるとも述べている。

このように、五感を使った遊びは子どもの育ちと大きく関連しているということは多方面から論じられている。筆者らが実践している五感を使った音遊びについても子どもの育ちに大きく影響しているといえるのではないだろうか。

そこで、今回は、この五感を使った音遊びの活動のうち、身体表現活動の場面と楽器演奏の活動場面からみえる子どもたちの姿を振り返ることにより、子どもの表現がどのように変容し育っ

ていくのかを考察したいと思う。

2. 研究の目的

本研究では、筆者らが本学附属の認定こども園 A 園 B 園にて、保育教諭と共に行っている五感を使った音遊びの実践場面を振り返り、実践場面に見られた子どもの表現する姿を分析・考察することにより、子どもの表現の育ちを明らかにすることを目的としている。子どもの姿の分析・考察には『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』（フレーベル館）を用いることにより、音遊びを特別な教育・保育の時間として捉えるのではなく、保育の中で行われる子どもの遊びの一つとして捉え、子どもの表現の育ちと子どもの心身の発達との繋がりを考えたいと思う。また、子どもの表現する姿や場面を詳細に振り返ることにより、音や音楽がどのように効果的に影響しているのか、保育において音や音楽が子どもの育ちをどのように支えているのかについても言及できればと思う。本研究により音遊びと子どもの表現の育ちの関連が明らかになれば、以下の点から保育の向上に寄与できるのではないかと考える。

1. 乳幼児期～3・4・5歳児へと連続して行われる保育の質の向上
2. 研究を通して得た結果を保育者となる本学学生に教授することによる保育者の資質向上
3. 保育における「音遊び」の深化と質の向上

次に、本研究で取り上げている「五感を使った音遊び」について述べる。

3. 五感を使った音遊びとは

「五感を使った音遊び」とは、音や音楽を通して『聴く・見る・触れる・感じる・考える』といった様々な感覚を使う遊びである。これらの感覚について、中島・山下（2002）は発達の可能性に深く関係するとして、以下のように述べている。

（1）聴く

聴くことだけでも、外界とのやりとりは行われる。音や音楽を生活の中で聴くことで、さまざまなイメージや感情の豊かさにつながる感覚を持つことができる。音を聴くことで、発達に欠くことのできない、外界との関わりそのものを発達させることになる。

（2）見る

音は見ることができる。音を出そうとする人の表情や動きを見て、マレットの高さや振り下ろされるスピードを見て、音を聴くように、「見る」ことができる。

（3）触れる

音に触れることは、振動に触れる体験となる。さまざまな楽器の振動は、人の原初的感覚である触覚の刺激となる。手で触れることは、その後の手の操作へとつながっていく。

（4）動く

音は、人が音を出す時に、さまざまな動きを要求してくる。その人の動きのままに音は動き、表現する。その人の動きが呼吸の動きとなり、心の動きとなる。音楽を聴いて心が動けば、自然に身体が動く。たくさんの動きのヴァリエーションで、たくさんの音や音楽を生み出し、そして音や音楽と共に動くことで、たくさんの心の動きを体験できる。

(5) 感じる

音や音楽を感じることは、自分を感じることにつながる。わずかな音を感じられることや、わずかな音楽のフレーズに感覚を傾けることは、環境に対して敏感で、人の心を豊かに感じることを可能にする。そして、感じることは、理解につながっていく。

(6) 考える

さまざまな感覚を同時に使用することができるようになると「考える」ことが可能になっていく。音の意味を考えるだろう。音を出す時に考えるだろう。考える時の整理力や構成力は、音が音楽になっていく過程や音楽を構成する過程と同じ発達の段階を示す。さまざまな感覚を統合させながら、音をイメージしたり音を出したり音楽することで、人は考え、そして豊かに発達していく。

このように、音や音楽は、人がさまざまな感覚で体験していける可能性を持っている。筆者らは、これらの発達に関係する6つの視点を用いて「五感を使った音遊び」を行い、音遊びの中で見える子どもの姿を観察・考察しながら実践を行っている。「五感を使った音遊び」の実践プログラムは『音と人をつなぐ コ・ミュージックセラピー（春秋社）』（p.137）に記されている活動の流れを用いている。

以下に「五感を使った音遊び」の主なプログラムを示す。

① 始まりの歌・ハンドドラム挨拶

始まりの歌では、活動の始まりとして毎回決まった歌をうたい、これからの活動に期待が持てるよう楽しい空間をつくる。ハンドドラム挨拶では、子ども一人ひとりと向き合う。



<写真1：ハンドドラム挨拶の様子>

② 手遊び歌

子どもの興味関心や発達に合った手遊び歌をする。楽しい雰囲気の中で他者と関わりを持てるようにする。

③ 小プレイ

これからの活動のウォーミングアップとして、音や音楽を使った視覚的、触覚的、認知的な遊びを行う。

④ リズム・ムーブメント

音や音楽を聴きながら、様々な身体の動きを体験する。基本的な身体の動きでは、ピアノの音を聴きながら、歩く、止まる、走る、後ろ歩き、回転、片足立ち、ジャンプ等の発達段階に合った動きを体験する。その他子どもの興味や発達に応じて、様々な動物の動きや野菜をイメージした動き等を行う。



<写真2：リズム・ムーブメントの様子>

⑤ リラクゼーション

床に寝転がり、ゆったりとした音楽を聴きながら心身ともに弛緩する。シャボン玉やオーガン

ジーン等の素材を用いることもある。

⑥音付け絵本

絵本の読み聞かせをしながら場面に合った音付けをすることで、物語の世界をより感受しやすく、理解しやすく、イメージ豊かに体験できるようにすると同時に、音・音楽を、より深く豊かに体験する。

⑦大プレイ

プログラムの主活動として、楽器を使ったコミュニケーション活動やイメージを持って音を描く、身体を動かす、友達と一緒に考えたり工夫したりする遊びを行う。



<写真 3：音を描く様子>

⑧楽器演奏

保育者の演奏するピアノを聴きながら、打楽器を演奏する。自由に音を鳴らしたり、曲調に合わせて楽器を叩き分けたりする。



<写真 4：0歳児楽器演奏>



<写真 5：4歳児楽器演奏>

参考として、以下にこれまでに行った音遊びの各プログラム内容の一覧を示す。

	0歳児	1・2歳児	3・4・5歳児
②手遊び歌	<ul style="list-style-type: none"> ・一本橋こちょこちょ ・あたまかたひぎボン ・あがりめさがりめ 	<ul style="list-style-type: none"> ・パン屋さんにお買い物 ・いっぴきの野ねずみ ・トントントントン ひげじいさん ・かなづちトントン 	<ul style="list-style-type: none"> ・小さな庭 ・手と手と手と ・キャベツの中から ・奈良の大仏さん ・大工のきつつき ・魚がはねて
③小プレイ	<ul style="list-style-type: none"> ・いないいないばあ <p>歌遊び（さるなどの人形を缶で隠しておき、子どもが缶を取ったら歌をうたう。見えているものと音楽のある・ないのつながりを楽しむ活動）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・木玉転がし 	<ul style="list-style-type: none"> ・飛び出し人形（人形が出てきたら楽器の音を鳴らし、見えているものと音のある・ないのつながりを楽しむ活動） ・素材回し（木玉やたわし等様々な感触のする素材を回す活動） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ブラックピクチャー（黒で描かれた丸や四角等様々な形を見て、イメージする活動） ・ハンドドラムリレー（ハンドドラムを円形に並べ、ボンゴのリズムによって順番に音を鳴らす活動）

④リズム・ムーブメント	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的な身体の動き（歩く・走る・ジャンプなど） ・楽器の音を聴いて動く活動（主な使用楽器は写真 6 参照） ・動物をイメージした動き（犬、ねこ、かえる、ゾウなど） 	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的な身体の動き（歩く・走る・後ろ歩き・回転・ジャンプなど） ・楽器の音を聴いて動く活動 ・動物をイメージした動き（犬、ねこ、カエル、ヘビ、うさぎ、ゾウなど） 	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的な身体の動き（歩く・走る・後ろ歩き・スキップ、片足立ち・回転など） ・動物をイメージした動き（ライオンやチーター、ペンギンなど音からイメージしたものや子どもが表現したいもの） ・野菜をイメージした動き ・忍者になりきる活動
⑤リラクゼーション	（使用した素材） <ul style="list-style-type: none"> ・オーガンジー ・シャボン玉 ・ブルーシート 	（使用した素材） <ul style="list-style-type: none"> ・オーガンジー ・シャボン玉 ・ブルーシート 	（使用した素材） <ul style="list-style-type: none"> ・オーガンジー ・シャボン玉
⑥音付け絵本	<ul style="list-style-type: none"> ・いないいないばあ ・がたんごとんがたんごとん 	<ul style="list-style-type: none"> ・たまごのあかちゃん ・ぺんぎんたいそう ・もりのてぶくろ 	<ul style="list-style-type: none"> ・すいかのたね ・さつまのおいも ・ぐるんぱのようちえん
⑦大プレイ	<ul style="list-style-type: none"> ・歌と楽器（かえるのがっしょう…ギロヤカバサ、きらきら星…ツリーチャイムのように歌に合った楽器を鳴らす） ・ぼっとな落とし（写真 10 参照） 	<ul style="list-style-type: none"> ・歌と楽器 ・音絵（様々な楽器の音や音楽を聴きながら、感じたままに描く活動） 	<ul style="list-style-type: none"> ・音絵 ・すいかを描く活動 ・楽器指揮（前で動く人の動きに合わせて、他の人は楽器の音を鳴らす）
⑧楽器演奏	<ul style="list-style-type: none"> ・おもちゃのチャチャチャ ・ミッキーマウスマーチ ・あわてんぼうのサンタクロース 	<ul style="list-style-type: none"> ・おもちゃのチャチャチャ ・ミッキーマウスマーチ ・さんぼ ・勇気りんりん 	<ul style="list-style-type: none"> ・さんぼ ・南の島のハメハメハ大王 ・夢をかなえてドラえもん ・おどるポンポコリン

3. 「音で遊ぼう」の取り組みについて

本学附属の認定こども園である A 園 B 園の 2 園では、特色ある保育プログラムの 1 つとして、五感を使った音遊び「音で遊ぼう」を平成 27 年（2015 年）より実施している。

この、五感を使った音遊び「音で遊ぼう」は、音や音楽の「遊び」を通して子どもたちの豊かな感性や表現力、創造性を養い、子どもたちの健やかな心身の発達を促すことを目的に導入された保育プログラムである。導入当初は 3 歳以上児のみの実施であったが、平成 29 年（2017 年）より 0 歳児～5 歳児までの全園児を対象としての実施が開始した。また、この「音で遊ぼう」は、特別な時間として行われる音遊びではなく、日常の保育の中で音や音楽で遊ぶことが子どもの成

長・発達に良い影響を与えるであろうという考えのもと、クラス担当保育教諭が保育の中で継続して実践を行っている。筆者らは、月に1回園に伺い、各クラス保育教諭と共に実践を重ねる中で、より子どもの姿に合わせた遊びの展開や音の使い方等について保育教諭と共に振り返りと改善を繰り返しながら、音遊びの質の向上を目指して取り組んでいる。

4. 研究の方法

2022年4月～2024年1月までの期間、筆者らが本学附属の認定こども園A園B園にて保育教諭と共に実践した音遊びの記録を基に子どもの表現の育ちについて考察する。なお、記録の分析については、(A)身体表現活動の場面における子どもの姿と、(B)楽器活動の場面における子どもの姿の2つの側面に分けて行うこととする。研究の手順は以下の①～③の通りである。

- ① 「五感を使った音遊び（音で遊ぼう）」の実践記録（動画、記述記録）を日付ごとに経過をまとめる。
- ② 経過記録から、実践場面「身体を動かす活動」「楽器演奏」の2つの活動場面における、表現に関する子どもの姿を抽出する。
- ③ 捉えた子どもの表現する姿から、子どもの表現がどのように変容し、子どもの育ちに繋がっているのか、また発達の連続性についても分析する。

子どもの姿については、実践記録および実践後に行った保育教諭との振り返り記録、動画記録を基に経過をまとめた。2022年度は、毎回の五感を使った音遊びの実践後、午睡の時間を利用して、15分～20程度の時間を設定し、保育教諭と筆者らと共に振り返りを行った。この時間に、音や音楽の使い方についても協議したり、音や音楽を通して観えた子どもの姿から子ども理解を深めることを行った。これらの記録を基に、子どもの表現の育ちについて考察する。

5. 身体表現活動場面からみる経過と結果

身体表現活動場面における子どもの姿を、年度・年齢ごとにまとめて記す。

【令和4年度（2022年4月～2023年3月）の実践記録より】

〈0歳児〉2022年7月、2023年1月実施

初めての音遊びの日であり、「何が始まるんだろう」と不安そうな表情の子どももいた。基本的な身体の動きは、保育者が抱っこをして動くことで体験したが、ピアノの音が止まり動きも止まると、不思議そうな顔をしていた。楽器の音を聴いて動く活動では、出てくる楽器（写真6）に興味津々の様子で、自ら近づいてくる姿も見られた。3名のうち2名は楽器の音に合わせて動く保育者をじっと見ていたが、笛の音の高低に合わせて保育者から体を動かしてもらおうと、嬉しそうに笑い何度も繰り返してもらおうことを楽しんでいた。

1月に行った基本的な身体の動きでは、音が止まるとともに自分で動きを止め、両手をあげて喜ぶ姿が見られた。ジャンプなどの大きな動きでも笑顔が多く見られ、体を思い切り動かすことが楽しいようであった。



＜写真6：楽器の音を聴いて動く活動における主な使用楽器＞

〈1歳児〉2022年6月、12月実施

それまでにも保育のなかで何度か音遊びを体験していたということもあり、ピアノの音の変化を聴き分けて歩いたり走ったりしており、走る音が聴こえると嬉しそうな声をあげながら笑顔で動く姿が見られた。ピアノの音とともにピタッと動きを止めると得意げな顔でポーズをとり、保育者を見る子どももいた。ピアノの音を聞きながら様々な動物をイメージし動く活動(以下、動物模倣)では、保育者の動きを真似しながら犬や猫、カエル、ヘビ、ゾウになり切って全身を使って動くことを楽しんでいた。

<2歳児>2022年4月、12月、2023年3月実施

なかには自分では中々動こうとせず、友達の様子をじっと見ている子どもや保育者と一緒に手を繋いで動いている子どももおり、それぞれのペースで活動に参加していた。ピアノの音を聴いて歩く場面では、ぴょんぴょん跳びはねるように動いている子どももいた。音楽のテンポとは合っており、楽しい気持ちが表れているようであった。



<写真7:音とともに
ぴったり止まる2歳児>

<3歳児>2022年9月、11月実施

ピアノの音を聴いて歩く場面では、保育者の弾くピアノのテンポにぴったりと合わせて歩いている子どももいた。楽器の音を聞いて動く活動では、初めて聞くフィンガーシンバルの音に笑いながら、自分が感じたままに表現したり、友達の真似をしたりして動く姿が見られた。

<4歳児>2022年6月、2023年2月実施

動物模倣のなかで猫になって動く場面では、近くにいる友達同士で猫になってじゃれ合う姿が見られた。また、実践者がピアノで低い音を鳴らし「(動物)何が来た?」と問いかけると、「ライオン」「ぞう」「恐竜」など、低い音からイメージした大きな動物を自信満々に答え、それぞれが考えた動物を自分なりの動きで表現することを楽しんでいた。

2月に行った動物模倣では、実践者が高い音を鳴らすと、「アリ」「リス」「ねずみ」など小さい動物になり切っていた。なかには小さく丸まったまま跳びはねている子どももおり、ピアノを弾いている実践者には何の動物かは分からなかったが、ピアノの音を聴いて感じたままに動きで表現しているようであった。

<5歳児>2022年7月、10月実施

海をイメージしたピアノの音を聴きながら、海の生き物に変身するという活動では、それぞれカニや魚、サメ、イルカ等、思い思いの生き物になりきって動いていた。

10月に行った野菜をイメージして動く活動では、ひとつの野菜でもそれぞれのイメージする形によって、動きの表現が違っていた。(まっすぐなきゅうり、曲がっているきゅうり等)実践者が「今度はみんなで一緒に野菜を作ろう」と提案すると、一人の女の子が「ネギがいい」と言い「ネギは長いから…」と自分たちで考えて手を繋ぎ、縦に長くなることでネギを表現していた。



<写真8:野菜をイメージして
動く活動の様子>

【令和5年度(2023年4月～2024年1月)の実践記録より】

<0歳児>2023年7月、10月、2024年1月実施

歩き始めたばかりの子どももおり、保育者と手を繋ぎ、ピアノの音を聴きながら動くことが楽しい様子であった。楽器の音を聴いて動く活動では、楽器の音を鳴らす前に「パパパヤ〜ヘイヘーイ！」とキッズボンゴをリズムよく鳴らしながら踊ると、不安そうに離れたところから見ていた子どもも思わず体を動かしていた。足を大きく上げて踏み鳴らし、楽しい気持ちが表れていた。

<1歳児>2023年6月、10月、12月実施

0歳児から音遊びを経験している子どもも多く、ピアノの音を聴いて自信満々に胸をはって歩いていた。動物模倣では、犬になりきると「ワンワン！」と声でも表現し、それに保育者が応えると嬉しそうに笑っていた。カエルの動きが特に楽しかったようで、満面の笑みで跳びはねていた。まだ大きくジャンプすることが難しい子どもも、友達や保育者の動きを見ながら手を上にびよーんとあげるなど、自分なりに動く姿が見られた。

<2歳児>2023年4月、12月実施

4月は不安そうに保育者にくっついている子どももいたが、12月の実施時には堂々と腕を大きくふりながら歩く姿へと変化していた。特に走る音が聴こえると嬉しそうに「キャ〜」と声をあげながら友達と追いかけていた。

<3歳児>2023年5月、9月、11月実施

動物模倣では、実践者が「次はなにが来るかな？」と問いかけると「うさぎ」「パンダ」「チーター」など口々にやってみたい動物を答えていた。「チーター」はそれまでに表現したことのない動物であったが、1人の子どもが「チーターは足が速い」と高這いで速く動き始めると、みんなで速さを競い合うようにして動いていた。

<4歳児>2023年6月実施

基本的な身体の動きでは、音とともにぴったり止まりそれぞれにポーズをきめていた。またいつもとは異なるタイミングで音を止めると面白そうに笑い、よりピアノの音を聴こうとする姿が見られた。

<5歳児>2023年4月、7月、2024年1月実施

1月には、子どもたちが様々な動きに挑戦することが好きで、想像力豊かに遊んでいるという様子を保育者から聞き、忍者の動きを取り入れることにした。実践者が「忍者になるよ！忍者走り！」と声をかけると、前傾姿勢をとり足音をたてないよう工夫して走っていた。また綱渡りや手裏剣など、実際にはないものをイメージしながら、綱渡りをしている友達を応援したり友達に向けて手裏剣をとばしたりなど、忍者になりきって表現することを楽しんでいった。

6. 身体表現活動の考察

身体表現活動場面からみる経過と結果から、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説(2018)』を踏まえて、「身体表現」の活動場面で見えた子どもの表現について考察する。

【0歳児：様々な感覚を通して音や音楽に触れ、体を動かすことを楽しむ】

0歳児クラスでは、音や音楽に合わせて保育者とともに様々な動きを体験しながら、体を思い

切り動かすことを楽しむ姿が見られた。また楽器の音を聴いて動く活動では、初めて出会う音をじっと「聴く」「感じる」、音に合わせて動く保育者を「見る」といった姿も多くあった。そして自分も「動く」ことで音の意味に気付いていった。これらの姿からは、様々な感覚をとおして音や音楽に触れることで音への興味や関心が高まっていること、体を動かすことや表現する喜びを味わっていることが分かる。自分の思いのままに動けることが増えるこの時期に、音や音楽とのつながりに気付きそれを楽しむことで、体を動かす意欲も高められていると考えられる。

【1・2歳児：自分の思いを表現し、音や音楽とのつながりを楽しむ】

1・2歳児クラスでは、ピアノの音を聴いてびよんびよん跳びはねたり、自信満々に誇らしげな顔をして動いたり、「キャ～」と声をあげながら走るなど、楽しい気持ちを思い思いに表現する姿が多く見られた。これらの姿からは「自分の思いや体の動きと音楽やリズムのつながりを、心から楽しんでいる」ことが分かる。また、同じリズムで体を動かす友達と楽しさを分かち合うことは、人と関わる力を養うことへつながっていると考えられる。そして表現を受けとめ応えてくれる保育者がいることで、感じたことを自分なりに表現しようとする気持ちが育まれるのではないだろうか。

【3・4・5歳児：友達とイメージを共有し、一緒に創る楽しさを味わう】

3・4・5歳児クラスでは、動物模倣などイメージしたものを表現する活動において、なりきることを楽しむだけでなく、なりきったもので友達との関わりを楽しむ姿が見られた。時には友達の動きを取り入れたり、自分が感じたことや考えたことを自分なりに表現したりと様々な表現を楽しんでいた。また5歳児クラスになると、野菜を表現する活動において、友達と一緒に考え工夫しながら動きを創っていく様子も見ることができた。これらの姿からは、自分で考えたことを表現することや友達と一緒に創る楽しさを味わっていることが分かる。このような経験を重ねることで表現の幅が広がり、想像力や協同性も育まれるのではないだろうか。

これらのことから、0・1・2歳児において、子どもたち一人ひとりのペースで参加することが保障され安心して自分を表現できる環境で、多様な感覚を使った音遊びの体験を重ねることで、自分の思いを表現したいという気持ちが育っていると言える。そして、0・1・2歳児において十分に体験してきた「身体で表現する喜び」がベースとなり、3歳以上児の自分で考えたことを表現することや、友達と一緒に創る楽しみへとつながっているのではないだろうか。またピアノの音や楽器の音はイメージを膨らませる効果があり、多様な感覚を使って音や音楽を体験することが、「感じられる」心を育て「想像力」や「表現力」を高めているであろうと考えられる。

7. 楽器を使った活動場面からみる経過と結果

【令和4年度（2022年4月～2023年2月）の実践記録より】

<0歳児>2022年9月、2023年1月実施

9月の音遊びは、保育者と一緒に音やリズムを感じ楽しむことを目的として、手遊びやシーツブランコなどの触れ合い遊びや身体を使った音遊びを行った。音遊びの中では、保育者との関わりの中で多様な感覚を使って遊びながら、少しずつ自ら興味を持って見たり動いたりする様子が見られていた。楽器遊び♪おもちゃのチャチャチャの場面では、手で叩いたり振ったりして音が出る楽器（ギャザリングドラムやキッズパーカッション、たまごマラカスや鈴など）が出てくると、すぐに手を伸ばし触ってみる子ども、保育者の膝の上で見ている子どもと反応は様々である。

♪おもちゃのチャチャチャのピアノ伴奏が聴こえてくると、ピアノを弾いている筆者の方を見る姿もある。A 児は、太鼓の上に両手を置いて保育者が叩く太鼓の振動を感じていたかと思うと、次はたまごマラカスを手に持ち太鼓を叩いたり、太鼓の上にマラカスを乗せたりしている。A 児は、保育者が太鼓を叩いた時に、太鼓の上に置いたマラカスが振動で揺れて音が出ることに気付くと、マラカスを手で転がしたり自分も太鼓を叩いてみたりしていた。(写真 9)

その様子を見ていた B 児は、保育者の膝の上から思わず立ち上がり、同じようにマラカスを太鼓の上に転がす。また、それまで保育者の膝の上で見ているだけだった C 児も、近くにある太鼓を自ら両手で叩いて音を出していた。



<写真 9：マラカスの音を確認めたり、太鼓の振動を感じて遊ぶ A 児>

1 月の音遊びでは、子どもたちがそれぞれ遊びに集中する姿があり約 40～50 分間の音遊びプログラムを楽しんだ。特に大プレイ「ぽっとな落とし」(写真 10) 遊びでは、いろいろな大きさの木玉を落としては穴から覗くことを繰り返している様子があった。身体を動かす活動の際に、筆者が楽器の音を出す場面があったが、子どもたちは筆者が持っている楽器に興味を示し、自分で鳴らしたい、筆者や保育教諭がしていることを真似したいという様子で、次々と筆者のそばに来て楽器を手に取り音を出そうとする姿があった。楽器演奏♪おもちゃのチャチャチャでは、フロアタムやエッグマラカスなどを音楽に合わせて鳴らし、身体を揺らしながらリズムに合わせて、「チャ・チャ・チャ」のリズムを感じて楽器を鳴らしたりしていた。



<写真 10：ぽっとな落とし>



<写真 11：0 歳児音遊びで使用した楽器



(左：キッズパーカッション 右：マラカス類) >

<1 歳児>2022 年 8 月、2023 年 1 月実施

8 月の音遊びは、身近なものを使って、形の変化を楽しむことを目的として行われた。手遊びや身体を動かす活動、絵本の読み聞かせをした後に、絵本の中で体験した擬音のリズムと共に新聞紙を使って遊ぶ活動が行われた。楽器遊びの活動は実施しなかった。

1月の音遊びでは、絵本「どんどこももんちゃん」の読み聞かせの後、子どもたちが「ももんちゃん」になって室内サーキット遊びを展開した。子どもたちが歩いたり、坂道を登ったり、一本橋を渡ったりする動きに合わせて、保育者たちが楽器で音付けをすると、子どもたちは音を出す保育者の方を見ながら動いたり、音を聴きながら動くことを楽しんでいる様子が見られた。また、くまと力比べする場面では、くまと押し合っている様子を保育者がスタンドドラムで音付けすると、楽器の方に興味を持った子どもたちが集まってきて、音を鳴らし始めた。子どもたちは音を出すことが楽しい様子であったが、そのうちに子どもたちの音に合わせてくま役の保育者が動いていることに気づき、何度も嬉しそうにスタンドドラムの音を鳴らし、保育者の動きを見て遊んでいた。

<2歳児>2022年5月、11月実施

2歳児音遊びは、音に合わせて身体を動かしたり、友達と楽器に触れる楽しさを感じたりすることを目的として行った。

5月の音遊びでは、身体を動かす活動や積み木を使った遊びなどが計画され、楽器遊びは♪おもちゃのチャチャチャの曲で、全員一緒にキッズパーカッションやツリーチャイムなど手で叩いたり触ったりして音が鳴らせる楽器で行われた。子どもたちは、実践者が用意した楽器を自由に移動しながら楽器を鳴らす姿があった。歌の「チャ・チャ・チャ」のリズムに合わせて叩く子ども、他児を押しよせながらもいろいろな楽器の音をたくさん鳴らしたい子ども、どの楽器にしようか様子を見ている子どもの姿などが見られた。

11月の音遊びは、身体を動かす活動を主として計画され、楽器遊びは♪おもちゃのチャチャチャ、さんぽ、ミッキーマウスマーチのメドレーで行った。5月と同じく全員で一緒に好きな楽器を自由に移動しながら演奏する形であった。曲が始まるとすぐにテンポよく叩く姿が見られ、歌に合わせて楽器を鳴らす中で、他児と音が合ったり、リズムを感じて叩く様子が見られた。中には、自分がしたい楽器を保育者に伝えて用意してもらおう子どももいた。



<写真 12：おもちゃのチャチャチャの曲に合わせて自由に楽器を鳴らす 2歳児>

<3歳児>2022年7月、12月、2023年2月実施

3歳児の音遊びは、友達や保育者と一緒に音や音楽に合わせて身体を動かすことや楽器の音を出すことを楽しむことを目的として行った。

7月の音遊びの主なプログラムが、音や音楽と一緒に描く活動であったため、楽器演奏は実施しなかったが、子どもたちはエネルギーが発散しきれず落ち着かない姿が見えた。保育者との振

り返りでは、短い時間でも楽器演奏の時間を組めばよかったという意見が出された。

12月の実践では、♪赤鼻のトナカイの曲に合わせて、子どもたちが3～4人ずつ一緒に楽器を移動しながら演奏するように楽器を構成した。子どもたちは自分の順番がくると嬉しそうに出て来て、他児と一緒に楽器を叩く様子があった。曲調が変化するとすぐに気づいて楽器を移動する子どもや他児の動きに合わせて移動する子どもの姿があった。曲の最後に配置されたシンバルをジャンと鳴らして笑みを浮かべる子ども、何度もシンバルをジャンジャンと叩きたい子どもと様々であるが、シンバルを叩いた後は保育者や他児の顔を見る子どもが殆どであった。

2月の音遊びでは、子どもたちの大好きな♪北風小僧のかんたろうの曲に合わせて楽器演奏を行った。写真14に見られるように、友達と一緒に曲の構成に合わせて楽器をリズムよく生き生きと演奏する姿が見られた。曲のフレーズが変化すると、それに気づいて楽器を移動する様子も見られた。曲の最後ではシンバルを思い切り鳴らして嬉しそうな表情をする子どもの姿があった。



<写真13：3～4歳児 楽器演奏の楽器構成の一例>



<写真14：楽器を移動しながら音楽に合わせて演奏する様子>

<4歳児>2022年6月、10月、11月、2023年2月実施

4歳児の音遊びは、音や音楽に合わせて友達と身体を動かしたり、楽器を使って演奏したりして活動を楽しむことを目的として行った。

6月の楽器演奏では、♪ミッキーマウスマーチの曲に合わせて構成された楽器を4～5人ずつ移動しながら演奏した。自分で曲を聴きながらタイミングをとって叩いたり、フレーズの終わりを合わせようとする姿があった。順番を待つ子ども達も歌ったり手拍子したりしていた。

10月は、♪勇気100%の曲に合わせて楽器演奏を行った。この日は事前の計画なしで実施する

ことになり、用意した楽器構成が曲に合わず、子ども達が力任せに音を出し続けるという姿に繋がりが、子ども達は満足できず終わった。

11月には、♪南の島のハメハメハ大王の曲に合わせて4～5人ずつ交代で構成した楽器を移動しながら演奏した。歌の「ハメ・ハメ・ハ」に合わせて太鼓とシンバルをテンポよく叩く姿や他児と一緒に合わせて叩くことを楽しむ姿があった。待っている子どもたちも「ハメ・ハメ・ハ」に合わせて振付をして一緒に楽しんでいた。

2月は、子どもたちの好きな曲である♪勇気100%の曲に合わせて楽器構成をした。5人ずつのグループに分かれて、自分たちで使いたい楽器を決めて色々な楽器で演奏することを楽しんでいた。順番を待つ子どもたちも一緒に歌を歌ったり、ダンスしたりして楽しみながら一緒に音楽を楽しんでいる様子だった。

<5歳児>2022年5月、6月、10月、12月実施

5歳児の音遊びは、音や音楽に合わせて他児と一緒に身体を動かすことや感じたことを表現する楽しさを味わうという目的で行った。

5月と6月の実践では、絵本の読み聞かせから絵本に出てきた風や雨を描いて表す活動が行われ、楽器演奏は行わなかった。

10月の楽器演奏は♪夢をかなえてドラえものの曲に合わせて楽器を構成し、5～6人のグループに分かれて各パートで役割を分担し一緒に曲を演奏する合奏形式で行った。保育者の声かけやピアノの伴奏を聴きながらタイミングよく楽器を鳴らす姿、曲を聴き自分たちが鳴らすフレーズまで身体を揺らしながら待ったり、他のグループの音を覗き込むように聴く姿が見られた。



<写真 15 : 5歳児 楽器構成の一例>



<写真 16 : グループに分かれて各パートを演奏する5歳児の楽器演奏の様子>

12月の実践では、♪赤鼻のトナカイの曲に合わせて、5～6人グループに分かれ、自分たちで楽器を選び、組み合わせて合奏した。太鼓類や鈴、普段手にすることが少ない打楽器など多様な楽器が準備されていた。子どもたちは嬉しそうに楽器を選び、演奏する場面では、曲に合わせて自分でリズムを決めて音を鳴らしたり、友達と話し合ってリズムを決めて演奏したりしていた。

【令和5年度（2023年6月～2024年1月）の実践記録より】

令和5年度よりB園では、3歳以上児クラスは3歳～5歳児の異年齢クラスの編成となった。そのため3歳児～5歳児についてはまとめて実践記録を記す。

<0歳児>2024年1月実施

リズム・ムーブメント（身体を動かす活動）の中で、実践者がギロやビブラスラップなどの楽器の音を鳴らすと、じっと音を出す実践者の方をみたり、楽器の音に合わせて動く保育者を見て笑ったりしている。楽器に興味を持って触れようとする子ども、保育者や実践者と楽器の音を出してみても笑顔になる子どもと様々な様子が見られた。

楽器演奏では、♪おもちゃのチャチャチャ♪さんぽの曲に合わせて、フロアタムやキッズパーカッション、マラカスなどを自分で鳴らして喜ぶ姿があった。

<1歳児>2023年11月実施

部屋に置いている楽器にすぐに興味を示し、シロフォンやマラカスなどを鳴らそうと楽器の方に集まる。シロフォンの音を鳴らすことが楽しくてマレットを持って音をたくさん鳴らして遊んでいる様子がある。

楽器演奏では、♪おもちゃのチャチャチャや♪ミッキーマウスマーチの曲を聴きながら、身体を揺らしリズムに乗って楽器の音を出す様子が見られた。自分の音をたくさん表現したいという姿であった。

<2歳児>2023年7月実施

この日の大プレイは音や音楽を聴きながら描く活動「音絵」を行った。楽器の音が聴こえるとクレヨンを持つ手を思い思いに動かしながら模造紙に点や線を描いていた。「ドーン」と大きなスタンドドラムの音が聴こえると、大きく手を振り上げて描いたり力強く描く様子があった。楽器の方を見て音を確認するような様子もあった。

楽器演奏では、♪南の島のハメハメハ大王の曲に合わせて友達と一緒に楽器を移動しながら音を出すことを楽しんでいる様子があった。「ハメ・ハメ・ハ」の言葉と音楽のリズムに合わせてテンポよく叩く姿も見られた。

<3～5歳児>2023年6月、9月、12月実施

3～5歳児までの子どもたちが一緒に音遊びを行った。楽器の音を聴いて動く場面では、5歳児がすぐに音に反応して動きはじめると、3歳児・4歳児の子どもたちもそれを見て一緒に動き始める様子があった。

楽器演奏では、♪南の島のハメハメハ大王の曲に合わせて、歌いながら踊る子ども、楽器をテンポよく鳴らす子どもと様々な様子が見られた。楽器を演奏する様子は、曲を聴きながらフレーズを感じて楽器を移動したり、リズムよく叩いたり、勢いよくシンバルを鳴らす様子が見えた。

8. 楽器を使った活動の考察

楽器を使った活動場面からみる経過と結果から、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説(2018)』を踏まえて、「楽器演奏」の活動場面で見えた子どもの表現について、【0歳児】【1・2歳児】【3～5歳児】の3つの年齢区分に分けて考察する。

【0歳児：音に気付き興味関心が芽生える】

A児が楽器に触れ保育者が鳴らした楽器の振動を楽しむ姿、また、マラカスに気付いて自ら音を出そうとしたり、太鼓の振動でマラカスが動き、マラカスが動くと言音が出るということを発見し、自ら試したりする子どもの様子から、環境へ自ら関わって遊ぶ過程が見えると思う。これには保育者との信頼関係が育まれていることはもちろんであるが、安心して過ごせる空間の中で、保育者の関わりによって、音や音楽に気付くことが自ら主体的に遊ぶことに繋がっていると考えられる。更に、この場面では、側にいたB児とC児の姿にも注目したい。B児とC児は保育者の膝の上で楽器に触れず見ていたのだが、A児の気付きによって、B児とC児もまた、自ら楽器に手を出し試す行動に出た。このことは、いかに子どもと保育者の関わり、環境の構成が大切であるかを示していると考えられる。

【1・2歳児：自ら環境に関わり楽器の音を楽しむ】

1歳児の楽器遊び場面では、自分で動くことを楽しみ、動きに合わせた楽器の音が付くことにより、動きと楽器の音との関係性に気付き、遊びを楽しむ様子が見えた。さらに、楽器に興味を持ち、楽器を自ら操作して音を出して遊びたいという姿があった。この様子から、0歳児の楽器の音に気付き、自分の感覚を通して音や音楽を体験するという姿から、1歳児になると、自分ではいろいろな楽器に触れて音を出すことを楽しむようになっていくことが分かる。また、2歳児の楽器演奏では、歌に合わせてリズムよく音を鳴らす姿や自分で音をもっと満足するように鳴らしたいと楽器に関わる場面が多くみられた。このことから、表現する主体である自分を十分に発揮したいと子どもたちは感じていることが分かる。この自分を十分に表現したいという欲求を、楽器の音を出すことで叶えていくことができるのではないかと考える。

【3～5歳児：自己表現する喜びから協同的な表現へ】

3歳児では、楽器演奏の曲に合わせた構成の中で楽器を鳴らすことにより、自分の出す音が音楽に合っていると心地良いと感じている姿が見えた。曲の最後にシンバルを鳴らし保育者や他児を見るという子どもたちの様子から、シンバルを鳴らすことが、自分で出来た達成感を感じることに繋がっていると考えられる。また、4歳児では、歌詞に合わせ楽器を組み合わせて演奏することを楽しむ様子や、順番を待つ子どもたちも一緒に動いて参加するなど、友達と一緒に表現して楽しいという姿が多く見られたことから、子どもたちの相互関係が深まり、他者と表現を共有するようになっていくことが分かる。さらに、5歳児では、自分たちで楽器を選択し、友達と一緒に構成を考えたり、リズムを考えたりしていた姿から、友達と表現する過程を楽しんでいることが見えた。このことは、他者と協同しながら表現を生み出し、創り出すという表現活動の発展と言える。表現を創造的に楽しむという子どもの表現の育ちの姿であると言えると思う。

これらのことから、0歳児の時期に、子どもたちが安心して自分という存在を保育者に受け止めてもらいながら過ごし、子どもが五感を通して気付き体験したことが基盤となり、1・2歳児の

時期に表現する主体としての自分を十分に発揮することから表現する意欲が育ち、更に3歳以上児での協同的な表現体験が、他者と共に表現を創り出す力へと繋がっていくと言えるだろう。

9. 総合考察

五感を使った音遊びでの子どもの表現する姿から、子どもたちの豊かな発達のためには、子どもたち自身が五感を使って様々な対象（ヒト・モノ・コト）と出会い、その対象を五感を通して感じ、自分の身体を通して体験することが欠かせないということが分かる。五感を使った遊びは、日常的な生活体験や遊びの中での自然体験など、様々な場面で可能だが、今回筆者らが行っている五感を使った音遊び場面から、音や音楽を使う意義や音や音楽が子どもの育ちをどう支えているのかを考えてみたいと思う。

まず、音や音楽は人の感覚を通して感じられる多様な可能性（聴く・見る・触れる・動く・感じる・考えるの6つの発達に関係する視点）を持っており、その特性から、言葉ではない感覚の共有や時間の共有、空間の共有をもたらすものであると考えられる。このことが、子どもの表現の育ちに大いに関係していると言えるのではないだろうか。

そして、音や音楽の持つ多様な可能性により、子どもが音や音楽を感じたままに表現することや自分なりに表現することが、動きや楽器を通して実現する。音で表現できること、音を感じて表現することにより、その表現を他者に受けとめてもらえる、認められるという経験を重ねられる。これは、「ありのままの自分でいい」と思えることにつながり、自己肯定感を育てていくことに繋がる。このことは人が生きていく上での基盤となる。

また、人と一緒に同じリズムを共有する、動く、音を合わせることで、楽しい気持ちでつながり、人と関わり合う喜びを感じられる。気持ちが通じ合う経験は、自分の気持ちや考えたことが音や音楽を通して他者に伝わることを体験することにも繋がり、さらに表現しようとする意欲が高まる。このことは子どもの表現の育ちの土台となり、表現する喜び、他者と創造する表現へと繋がっていくと考えられる。

これらのことから、五感を使った音遊びは、子どもの表現の育ちと豊かな感性を育むことに大きく寄与していると考えられる。

10. おわりに

今回、五感を使った音遊び場面で見える子どもたちの姿を振り返る中で、子どもたちが自分の「いま」を体ごと体験したり表現したりしていることに気づいた。音や音楽で出会い、共に遊びを生み出すことは生きる喜びに繋がり、その場にいる人たちとの繋がりも生み出してくれるのだと感じた。さらによりよい実践となるよう、現場の保育教諭らと連携した取り組みを今後は進めていきたいと思う。

《参考・引用文献》

- 1) 藤澤薫里・平松美由紀・林修（2020）幼稚園・保育所において展開される遊び・活動における幼児の五感の育ちに関する事例的検討-遊び・活動にみる保育者と幼児の対話の場面を中心として - 和歌山大学教育学部紀要 人文科学 vol. 70 pp65～72
- 2) 小澤拓大・小川美由紀（2022）多感覚を使った音遊びと子どもの発達 — 養護的視点からの検討-宮崎学園短期大学紀要 vol.14 pp.35-40

- 3) 中島恵子・山下恵子 (2002) 音と人をつなぐコ・ミュージックセラピー Co-Musictherapy 春秋社
- 4) 内閣府・文部科学省・厚生労働省 (2018) 幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説 フレーベル館
- 5) 星崎明里・後藤祐子 (2023) 五感を使った音遊びにおける子どもの表現の育ち (1) —身体表現の活動場面から見えること— 日本保育学会第76回大会発表論文集 (2023) pp.K119,K120
- 6) 後藤祐子・星崎明里 (2023) 五感を使った音遊びにおける子どもの表現の育ち (2) —楽器演奏の活動場面から見えること— 日本保育学会第76回大会発表論文集 (2023) pp.K117,K118